

アイルハルト・フォン・オーベルク作

## 『トリスタン物語』(前編)

小澤 昭 夫 訳

### はじめに

中世のトリスタン文学の中で、アイルハルトの作品が占める位置は重要である。これがドイツ語で書かれた最も古いトリスタン叙事詩であり、この作品によって、トリスタン伝説が文学的素材としてドイツに持ち込まれたからである。同時にまたこれは、未完に止まったゴットフリートの作品、断片としてしか遺されていないベールールやトマの作品に比べ、物語の素材の唯一完備したテキストを提供するものでもある。それ故、トリスタン叙事詩の原テキストと推定されるエストワール (Estoire) を解明し復元させる意味でも、その存在価値は大きい。

アイルハルトの「トリスタン物語」の初めから終りまで揃った完全なテキストとしては、13世紀の改作 (Bearbeitung) が、15世紀のドレスデン写本 (略号 D) とハイデルベルク写本 (略号 H) に伝えられている。本来の古いテキストは、この作品の成立年代 (1170年頃、または1185-90年) にまだ近く、何れも12世紀末のものと推定される三つの写本断片、即ちレーゲンスブルク断片 (略号 R)、マクデブルク断片 (略号 M)、シュタールガルト断片 (略号 St) に遺されているだけである。この他には、13世紀のチェコ語訳と、15世紀の印刷された散文民衆本が、間接的ながら本来のテキストを伝えるものとみなされている。

このアイルハルト作「トリスタン物語」(前編) は、

Eilhart von Oberg: Tristrant. Synoptischer Druck der ergänzten Fragmente mit der gesamten Parallelüberlieferung. Herausgegeben von Hadumod Bußmann, 1969 (Altdeutsche Textbibliothek Nr.70)

を底本として、上記三つの古い断片 R, M, St を訳出したものである。断片の配列順序は次の通りである。

Rm 表	1608-1624	Rm 裏	1655-1679
Rd	1726-1843		
M 1 表	2809-2854	M 1 裏	2863-2902
M 2 表	2911-2955	M 2 裏	2963-3005
Rr 1	3028-3131		
M3/4	3404-3600		
St	7064-7524		

断片 R のあとの小文字 m, d, r は、この断片の所在地 München, Donaueschingen あるいはかつ

ての所在地（現在は行方不明）Regensburgを意味している。

今回前編として訳出したのは、断片 Rr1 の終り、3131行までである。これに続く断片 M3/4 (3404-3600) と St (7064-7524) は、後編として訳出する予定である。

Bußmann のテキストでは、各行の左に行数が示されており、これは Lichtenstein 版 [Eilhart von Oberge. Hrsg. von Franz Lichtenstein. Straßburg 1877 (Quellen und Forschungen 19).] の数え方に従うものだが、訳文では、煩雑を避け、しかし原文との対照上、5行毎とし右側に示すことにした。

尚、三つの断片によって伝えられている総行数1075行は、アイルハルトの叙事詩全体の僅か10分の1程度である。

アイルハルト・フォン・オーベルク作  
『トリスタン<sup>1)</sup>物語』(前編)

[レーゲンスブルク断片mの表]

トリスタン殿が	
勇敢な戦士 <sup>2)</sup> であることが	
その時明らかになった。	1610
彼はこう思った。	
その乙女 <sup>3)</sup> のために、さらにはまた	
彼の仲間の者たちが、この乙女のこと	
うまく和平の交渉が出来るためにも <sup>4)</sup>	
自分の命を賭けよう、	1615
たとえ命を失うことになっても	
戦わずに死ぬよりは	
龍と戦って死にたいものだ。	
夜が明けるとすぐに	
優れた勇士トリスタンは	1620
大層念入りに	1620 a
武装すると	
大胆な男らしく	
堂々と馬を進めて行った。	
唯一騎で彼は奥地へ向かって <sup>5)</sup> 行った。	

〔レーゲンスブルク断片 m の裏〕

剣を手にして……<sup>6)</sup> 1655

けれども龍は

彼の乗馬を焼き殺した<sup>7)</sup>。

優れた勇士は龍に駆け寄った。

彼以外には誰も身につけたことのない

最上の剣で、 1660

彼は激しく龍に切り付けた。

怒りを込めてそれが振われるところでは、

誰一人その前で生き存えることはできなかった。

こうして勇士は勝利を占めた。

(2行欠落) (1665-1666)

それは彼には大変高くついた。

というのも彼は火に焼かれて

死に掛っていたからである。

(2行欠落) (1670-1671)

彼は龍の舌を切り取り、

ズボンの中に押し込んだ。

(2行欠落) (1674-1675)

そうしてから彼は沼に向かった。

そこで彼は身体を冷そうと思った。

美しい勇士はその時

焦げた木のように黒くなっていた。

〔レーゲンスブルク断片 d〕

王女をお与え下さるよう……<sup>8)</sup>

王はそれ(約束)を違えることは

できなかった。

(1行欠落)

けれども王は、誰が龍を倒したのか 1730

もっとよく知りたかった。

内膳頭は言った<sup>9)</sup>。

「(龍を退治したと)<sup>10)</sup> 私が主張しているのが

もし偽りだとすれば、

- それはあまりにも無作法というものでしょう。」 1735  
 彼は主君をだましおおせたも同然だった。  
 王は、それが本当だと思った。  
 それで王は、  
 内膳頭が  
 彼一人の力で 1740  
 大変男らしいやり方で  
 彼女を妻に迎えることになった旨  
 娘自身に話し、  
 公にもこう告げた。  
 王女を内膳頭の妻にする、 1745  
 彼が龍を打ち殺したのだから  
 彼女もまた喜んで彼を夫にできるだろうと。  
 するとすぐに王女は言った。  
 「父上、私の言う事を信じてください。  
 彼はあなたに何一つ本当の事を言ってはいません。 1750  
 彼は決してそんな勇敢な行いなどしていません。  
 龍に立ち向かう勇気を  
 どこから彼は取り出したのでしょうか。  
 どうぞ思い遣りを示して  
 真実を正しく聞いてください。 1755  
 この立派な方には  
 明朝まで待つように言って下さい。」  
 それで王はそのようにした。  
 (3行欠落)  
 内膳頭は、王が信義にかけて約束したことを  
 王に思い出させた。  
 それをそんなに長引かせることが  
 王には内心残念なことであった。 1765  
 龍を打ち倒したのが内膳頭かどうか、  
 その後どのような方法で王女イザルデ<sup>11)</sup>が知ったかを  
 さあお聞きなさい。  
 彼女はペロニース<sup>12)</sup>に、  
 夜が明けたら馬を三頭 1770

- 密かに連れて来るよう命じた。  
それから彼女は、  
侍女のブランゲーネ<sup>13)</sup>に、  
龍がどのような傷を負っているか  
自分の目で見るともりだと言った。 1775  
翌朝早く、小姓のペロニースが  
馬を引いて来た。  
そこで彼ら三人は馬に乗り  
すぐに駆けて行った。<sup>14)</sup>  
そのうちにこの美しい王女は、 1780  
トリスタンの残した足跡を見つけた。  
その時彼女はペロニースに言った。  
「龍を打ち負かした勇士を  
こちらへ乗せて来た馬の  
蹄鉄の打ち方を御覧なさい。 1785  
この国ではこんな蹄鉄の打ち方をしません。  
私達皆が知っていることです。  
この馬に乗ってここにやって来たのが  
たとえどこから来た人であれ、  
その人が龍を倒したのは 1790  
きっと確かです。」  
それからすぐに王女達は  
龍が死んで横たわっているところに着いた。  
彼女達はそこで  
色も見分けられない程に 1795  
ひどく焼け焦げた  
立派な盾を見つけた。  
(2行欠落)  
馬もまた焼けただれて横たわっていた。 1800  
(2行欠落)  
それで彼女等は、この馬が  
この国で飼育されたものではない  
ということを見極めるのは容易でなかった。 1805  
(2行欠落)

- 「この馬に乗ってここへ来た勇士は  
どこに行ってしまったのでしょうか。  
それが知りたいものだわ。」 1810  
と美しい王女は言った。  
「あの人殺しどもが、その人を殺してしまったのだわ。  
彼はこのどこかに埋められているのよ。」  
とすぐにまた彼女は言った。  
それから彼女はペロニースに 1815  
見付けることが出来るものなら  
墓を探すよう命じた。 1816 a  
探して、勇士を見つけてくれたなら 1816 b  
100マルク<sup>15)</sup> 与える  
と彼女は約束した。  
探し始めて間もなく  
ブランゲーネが、 1820  
勇士の横たわっている沼に行き当たった。  
この乙女は、彼を見つけ  
兜がルビーのようにキラキラ  
輝くのを見た<sup>16)</sup>。  
(2行欠落)  
「勇士を見つけました。  
ひどく傷ついています。  
彼の命を救いたいとお望みでしたら  
すぐにここへ来て下さい。」 1830  
と誠実なブランゲーネは言った。  
王女にとってこれは大変嬉しいことだった。  
彼女は、その病人のいるところへ  
すぐにやって来た。  
彼女は彼の兜を脱がせた。 1835  
それでトリスタンは  
そこに女たちがいるのが良く分った。  
目を開くと彼は  
そこにいて兜を脱がせてくれたのは  
誰でしょうかと尋ねた。 1840

『トリスタン物語』（前編）

王女はすぐに彼に答えた。  
「何も心配は要りません。  
兜は（後で返して上げます）<sup>17)</sup>

〔マクデブルク断片1の表〕

トリスタンは王に言った。  
「奥方の国の習慣を守って下さるよう  
あなたにお願いすることを  
奥方から命じられておりますが  
それがあなたには御不興でしょうか。」  
王はすぐに尋ねた。  
彼女の国にはどんな習慣があるのかと。 2810  
トリスタンは王に語った。  
奥方が初めて王の隣に  
休む時には、  
翌朝再び床を出るまで  
誰一人彼女を見ないように、 2820  
部屋に灯があってはならないのだと。  
彼女にそのことを喜んで認めると  
王は甥<sup>18)</sup>に言った。  
王は彼に、 2823 a  
その夜は彼自身が 2823 b  
婦人部屋の監督役たる権限を与えた。  
どのようにすべきか  
彼が良く知っているのだから  
灯は彼が消すように、  
そして奥方が望むことなら  
なんでもしてやってくれと  
王は熱心に彼に頼んだ。 2830  
監督役のトリスタンは、  
婦人部屋のあれこれの世話をすることを引き受けた。  
王が眠ることになった時<sup>19)</sup>、  
彼は、王が彼に要求することを  
何一つ許そうとせず、 2834 a

- 奥方に有利であるように、2834 b  
 まさに彼女の望むことを行ったのである。2835  
 彼はブランゲーネを密かに  
 王の寝床へ連れて行った。  
 これぞトリスタンが行った最大の  
 詐欺行為であった。
- というのは、まさに同じ部屋で2840  
 彼は愛人イザルデの隣に寝ていたからである。  
 けれどもそれは背信行為ではなかった。  
 彼は心ならずもそうしていたのだから。  
 呪うべき飲み物<sup>20)</sup>が  
 彼にそうさせていたのである<sup>21)</sup>。2845  
 丁度真夜中にブランゲーネは  
 王の許から戻ってきた。  
 起き上がって、王様のところへ行くようにと  
 彼女は王妃に言った。  
 このようにして2850  
 王は欺かれたのである。
- (1行欠落)
- この宮廷でその後一年間というもの  
 トリスタンの身は安泰であった。
- [マクデブルク断片1の裏]
- しかしその後間もなくして王妃は、  
 ブランゲーネが彼女の為に尽してくれたことに  
 死をもって報いよう2865  
 と考えるようになった。  
 自分の行いについて知っていることを、  
 ブランゲーネが人に話すのではないかと  
 彼女は恐れ、  
 計略を用いて2870  
 彼女の命を奪おうと思った。  
 これは邪悪な考えであった。  
 彼女は二人の貧乏な騎士<sup>22)</sup>に、



ブランゲーネを殺して貰うため  
銀60マルクを与えると申し出た。 2875  
その二人はそれを引き受ける気になった。  
王妃が頼むことなら  
何でもする、と彼らは約束した。  
王妃は彼らの手に銀を与えると、  
泉を見張る場所に 2880  
行くよう命じ、  
泉の水を汲んで行こうとする者があれば、  
男であろうと女であろうと  
その者の命を奪い、  
肝臓<sup>23)</sup>を取って持って来るように言った。 2885  
二人は沢山の銀のことを  
つらつら考えた。  
そうして二人は王妃が指示した見張り場所に  
出掛けていった。  
一方ブランゲーネに王妃は 2890  
気分が優れないと話した。  
誠実な人ブランゲーネは  
そのことを大変悲しんだ。  
そこでこの不実な王妃は  
果樹園に流れ出ている泉の水を 2895  
自分の為に汲んできてくれと言った<sup>24)</sup>。  
ブランゲーネは、王妃が命じたことを  
何一つ怠りはしなかった。  
彼女は金の水差しを取ると  
果樹園へ出掛けて行き 2900  
泉の水を汲もうとした。  
するとそこにあの二人が飛び出して来た。

〔マクデブルク断片2の表〕

若い女（ブランゲーネ）はこのように話した。  
「私は誠実さのために罰を受けるのです。  
王妃が私を殺せと命じたのですから。」

- どうかあなたがた、徳を行って下さい。  
 神の恩寵の為にもそうなさって下さい。 2915  
 私には殺される謂われはないのですから。  
 どうぞ今暫く私を生かしておいてください。  
 そしてお一人が王妃のもとへ急ぎ、  
 私を殺したと言って下さい。  
 その時、私があなた方にお話することを 2920  
 あの方にお伝えください。  
 何故あの方が私を処罰なさるのか、  
 罪もない私を殺そうとなさるのか分かりません。  
 神様が良く御存じですが、  
 あの方が立腹なさるようなことを、 2925  
 何かした覚えはありません。  
 何しろ私は、身内の者達を全部置き去りにして  
 あの方の幸福のために  
 一緒に異国へやって来たのですから。  
 それなのに私はこんなにも哀れに 2930  
 命を失わねばならないのでしょうか。  
 私達が祖国を離れる時  
 あの方の御母君が、  
 同じように小さい二枚の肌着<sup>25)</sup>を  
 私達に下さいました。 2935  
 私の言うことが、あの方には良く分ります。  
 私達がこの国に着く前に  
 あの方の肌着は裂けて  
 傷んでしまいました<sup>26)</sup>。  
 それであの方は、王様の隣で休まれる時 2940  
 堂々とそれを着られなかったのです。  
 けれども私の肌着は一度も着なかったので、  
 破れもせず新しいままでした。  
 あの方は、私にそれを貸して欲しいと頼みました。  
 私はいやいやながらそうしました。 2945  
 あの方があまり熱心にお頼みになるので  
 とうとう私はそれをあの方にお貸ししました。

私が、私の肌着を新しくて無傷のままに  
海を渡ってこちらへ  
持参したということ以外には、2950  
もうあの方に伝えて貰うことはありません。  
あの方が初めて王様の横に休まれたあの晩に、  
私はその肌着をあの方にお貸ししました。  
その時、私の肌着は、あの方に奉仕する為に  
乱暴に身に着けられてしまったのです。2955

〔マクデブルク断片2の裏〕

（哀れを催させる彼女の話が  
彼女の)<sup>27)</sup>命を救った。  
この女を殺しても、それがもはや  
自分達の名誉には結び付かない2965  
と彼らは考えた。  
そこへ犬が一匹やって来た。  
騎士の一人がすぐにその犬を殺して  
その場で肝臓を取り出した。  
彼はそれをシャツの中に隠すと2970  
権勢ある王妃のところへ  
密かに持って行った。  
王妃は彼に大変感謝して  
事の次第を尋ねた。  
「彼女は何か話しましたか。」「はい、話しました。」2975  
「さあそれを言うておくれ」すぐに彼は答えて、  
彼女が話した通りのことを王妃に語った。  
肌着のことと、それを王妃に貸したと  
彼女が言ったことを。  
「さあ、お願い、他にもっと話しましたか。」2980  
「いいえ本当に何も。もしそれが彼女にとって  
心から喜ばしいことでなければ<sup>28)</sup>、  
私達は彼女を生かしておいたでしょう。」  
「神様は私を地獄に落すに違いありません。」  
美しい王妃は言った。2985

「私がこの世に生を享けたことを  
 神様が哀れと御下さいますように。  
 惨めな私は今どうしたらいいのでしょうか。  
 ひどい思い違いをしていたなんて。  
 女でも男でも、これからはもう 2990  
 私の言う事を信用してはなりません。  
 私がした殺害行為のために、  
 神様が私の名誉と命を  
 危険に晒すがいいのです。」  
 それを敢えて示すかのように 2994 a  
 彼女は激しく泣いた。 2994 b  
 「悪魔が私をさらって行くがいい」と彼女は言った。 2995  
 彼女があまりに激しく我が身を叩き、  
 髪の毛を掻きむしったので、  
 見張り役のあの男は  
 驚いて彼女を見つめた。  
 そのうちに彼女はすっかり落ち着きを取り戻した。 3000  
 それを見て騎士は、  
 王妃の持っているその落ち着きが、  
 大きな苦しみの所為であるのを知り、  
 それ以上はもう黙っていられなかった。  
 「お妃様、御安心下さい。」と彼は言った。 3005

〔レーゲンスブルク断片 r の 1〕

王妃の婦人部屋に……  
 王妃が彼女（ブランゲーネ）の姿を見た時、  
 どう言ったか、さあお聞きなさい。 3030  
 「ようこそ戻って来てくれました、大事なあなた。  
 あなたが生きていてくれたことで、  
 私は、天にまします神様を誉め讃えます。  
 神様が確かにこの地上に降り立って、  
 あなたを苦境から助け出して下さったのです。 3035  
 私があなたに与えようと思った死を  
 神様が私に与えるにしろ、

私を奈落の底深くに  
沈めるにしろ、  
あるいは私の罪を赦して下さるにしろ、  
神様は王者にふさわしくお裁き下さいます。」  
3040  
そうしてこの身分高い婦人は  
ブランゲーネの足下にひれ伏した。  
王妃は彼女に深く懺悔して、  
自分が彼女に企てた殺害行為のことを  
3045  
忘れてくれるよう  
やさしい言葉をのべた。  
ブランゲーネもまたすぐに  
何かしてはいけないことを、  
もし自分がしたのであれば  
3050  
許して下さいと  
王妃の慈悲を求めた。  
その場に二人は跪いていた。  
大きな苦しみに  
二人は捉えられていた。  
3055  
二人を立ち上がらせる者は誰もいなかったので、  
起き上がって  
恨みを捨てあうのが良いと  
彼女等二人が思った時まで、  
長い間二人はそこに跪いていた。  
3060  
　　そうして二人の婦人は口付けし合った。  
王妃は、その後考えた。  
ブランゲーネのために、  
自分が彼女に与えた苦しみを  
どのようにして喜びで償えばいいかと。  
3065  
大変勇敢な人トリスタンは  
その時不在であった。  
彼は王と一緒に  
馬で森へ狩猟に出掛けていた。  
そこに彼の友クルヴェナル<sup>29)</sup>によって  
3070  
この経緯が伝えられた。

小 澤 昭 夫

- それを聞くとこの人の心には  
怒りと苦しみが生れた。
- 「このことはそっとして置く方が良いでしょう。」<sup>30)</sup>  
と彼（トリスタン）は王妃に言った。 3075
- 「こんな事があってはならなかったのです。  
ブランゲーネには、この殺害行為を 3076 a  
私に免じて赦して貰いましょう。 3076 b  
あなたは彼女と仲直りしなくてははいけません。 3076 c  
彼女はまだまだ精神的打撃から回復しきっていないのですから、 3076 d  
誠実にこの償いをなさって下さい。」
- 喜んでそうしようと  
誇り高い王妃は言った。
- これで和解は確固たるものになり、 3080  
婦人達は接吻し合った<sup>31)</sup>。
- トリスタンはその頃  
傷を負うこと無く<sup>32)</sup>、ひどく切り苛まれていた。
- 何によってか、を注意してお聞きなさい。
- 王の宮廷を取り仕切っていた 3085  
一人の有力な公爵と
- 四人の伯爵から、  
彼は宮廷内で憎まれていた。
- その訳を皆さんにお話しましょう。
- 彼が徳に適った生活をし、 3090  
名誉を得ようと努め、  
何時でも最善を尽したので、  
彼らは激しい憎しみを抱いていた。
- 自分たちが有能ではなかったので、  
その為に彼らは妬んでいた。 3095
- 優れた男には、これまでしばしば起こったし、  
今でもまだ起こるように、  
人々が彼を弁護するにもかかわらず、  
彼に悪意を持つ男が絶えることは決してないのだ。
- 人々が彼を誉めるのを聞き、 3100  
それに異論を唱えることが出来ないと、

- 意地悪な男は、正道をはずれ、  
得てして「それは嘘だ。」と言い勝なのである。  
そんなことは我々皆にはふさわしくない  
ということをはっきり認識しましょう。 3105  
何故ならそのような行いによって  
大きな称賛を得た者は誰もいなかったし、  
いてもまれだからである。  
だから愛を求めるように行動なさるがよい<sup>33)</sup>。  
さあ、お若い方々 3110  
有能さに心を寄せて  
悪意を厭うべきものとなさるがよい。  
神様を心から愛し、  
徳を求めて努力する者には  
滅多に災いは起こらない。 3115  
その上彼は、必要とする物なら何でも  
ちゃんと手に入れることが出来る。  
かつてこのような行いをした者は幸いである。  
有能かつ誠実で  
賢明な分別を 3120  
しっかりと心に持っている人なら、  
意地悪な人たちが自分を妬む事を  
少しも気にすることはない。  
そういう人に腹を立てずにはいられないのが、  
彼らには避け難いことなのだから。 3125  
それでも彼には、神様と善人たち全てが  
好意を寄せているものである。  
彼はそうされるに値したのだし<sup>34)</sup>、  
いつでもまたそうなのである。  
それにもかかわらず、意地悪な人達の心は 3130  
彼に対してひどく憤慨するものなのである。

テキスト・参考文献

Eilhart von Oberg: Tristrant. Synoptischer Druck der ergänzten Fragmente mit der gesamten Parallelüberlieferung. Herausgegeben von Hadumod Bußmann, 1969

(Altdeutsche Textbibliothek Nr.70).

Gottfried von Straßburg: Tristan. Nach der Ausgabe von Reinhold Bechstein herausgegeben von Peter Ganz. 2Bde., 1978 (Deutsche Klassiker des Mittelalters. Neue Folge Band 4).

Berol: Tristan und Isolde. Übersetzt von Ulrich Mölk, 1962 (Klassische Texte des Romanischen Mittelalters in zweisprachigen Ausgaben. Band 1).

Thomas: Tristan. Eingeleitet, textkritisch bearbeitet und übersetzt von Gesa Bonath, 1985 (Klassische Texte des Romanischen Mittelalters in zweisprachigen Ausgaben. Band 21).

Tristrant und Isalde. Prosaroman. Herausgegeben von Alois Brandstetter, 1966 (Altdeutsche Textbibliothek, Ergänzungsreihe 3).

Das Nibelungenlied. Nach der Ausgabe von Karl Bartsch herausgegeben von Helmut de Boor, 1979 (Deutsche Klassiker des Mittelalters).

Gottfried Weber/Werner Hoffmann: Gottfried von Straßburg, <sup>5</sup>1981 (Sammlung Metzler 15).  
ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク、石川敬三訳「トリスタンとイゾルデ」郁文堂、昭和52年(1977)

佐藤輝夫:「トリスタン伝説—流布本系の研究」中央公論社、昭和56年

### 注

- 1) アイルハルトは主人公を Tristrant と呼んでいるが、トマ作でもゴットフリート作でも、その主人公は Tristan と呼ばれているので、統一上ここでは敢えて「トリスタン」とする。ゴットフリートでは、この名前が「悲しみから生まれたトリスタン (von triste Tristan)」と、「悲しい (triste)」という意味の古フランス語に関係づけられているが、この語源説には根拠が無い (Bechstein/Ganz)。
- 2) wigant. Das Nibelungenlied でこの語が現れるのは61, 4と1002, 4の2箇所だけであり、「古語」であるとの注がある (但し Bartsch/de Boor 版による)。ゴットフリートの作にはもうこの語は見られない。
- 3) magedin. Isalde が magedin と称されるのはここだけである。
- 4) テキストは、daz die sin gesellen/des baz gedingen muosen. 貢物を求めてアイルランドからコーンウォールを訪れたモーロルト (アイルランド王妃の兄) を、トリスタンが一騎討で倒して以来、両国は敵対関係にあって、アイルランド国王は、コーンウォールからやって来る者には死をもって報復すると宣言していた。また一方でこの国は、質の悪い龍に苦しめられていたので、国王が、この龍を退治した者には、自分の娘を与えようと約束していた。この場面にはこのような背景があるので、若干意識してみた。
- 5) 散文トリスタンのこの行に該当する箇所では「危険に向かって (gegen der not)」となっている。
- 6) 写本Dでは「その時彼は剣を手にとっていた。」写本Hでは「彼はさっと剣を引き抜いた。」である。
- 7) この龍は口から猛烈な火を吐くのである。
- 8) テキスト (1726行) は、… im gaebe sin tohter で、接続法2式が使われている。写本Dでは He solde sine tohtir han.、散文トリスタンでは vnd das er jm sein tochter geben solt. であることから、間接話法による王に対する内膳頭 (1733行) の言葉と理解される。なお、この行には Punkt が無いが、内容上次行に続くとは考えられず、本来 Punkt があるべきものと思われる。



- 9) truhsatze (=truhsaeze, truhsaeze). 内膳頭は、トリスタンが龍を倒し、舌を切り取った（即ちレーゲンスブルク断編m裏によって示された場面）後で現場に駆け付け、龍の首を切って持ち帰り、それを証拠として、王女を妻とする権利を主張するのである。
- 10) 場面の背景を考慮して、訳者が補った。
- 11) Ysalde. トマ作では Yseut または Isolt, ゴットフリート作では Isolt または Isot である。因に、後者において Isolde が用いられるのは Isolt の 2、3、4 格としてである。
- 12) Peronis. ゴットフリートでは Paranis であり、Isolt の knappe (小姓) である。なお1776行では der chameraere と呼ばれているが、これも小姓と訳した。
- 13) Brangene. ゴットフリートの作では、アイルランド王妃（イゾルトの母）の niftel (近親の女性) でもあり、イゾルトの侍女にして、後にイゾルトとトリスタンの腹心の友となる。
- 14) ゴットフリートでは、龍を退治した本当の騎士を探し出すべく行動を起こし、探索を指揮するのは、母イゾルトである。彼女は、夢の御告で龍を倒したのが内膳頭ではないことを知るのである。従って、探索に出かけるのは四人である。
- 15) マルク (marc, marke, テキストでは mark) は、2875行にも見られるが、一定の重さ（半ポンド）の銀の延棒、金または銀の半ポンドを意味する。
- 16) ゴットフリートでは、トリスタンを最初に見つけるのは王女イゾルトである。
- 17) ( )内は写本Hによって補った。
- 18) トリスタンの母ブランシェフルールはマルケ王の妹である。
- 19) チェコ語の “Tristram” で、アイルハルトの作を手本にして書かれた部分のうち、断片と並行するのはここ（2833行）までである。
- 20) der unselige tranc. トリスタンとイゾルトが、アイルランドからコーンウォールへの船旅の途中、それと知らずに誤って飲んだ惚れ薬のことである。これはイゾルトの母が、娘とマルケ王との愛が未長く続く事を祈って、初夜に二人に飲ませる為にこしらえたものである。この愛の飲料には、その持続効果にアイルハルトでは4年、ベルールでは3年という期限が設けられているが、ゴットフリートとトマにはこの制限は無い。
- 21) 原文は der unselige tranc/het iz an die rete bracht. である。编者 Bußmann は、恐らく “hat diesen Plan bzw. Anschlag verursacht” の意味であろうとしているが、敢えて訳文のようにした。
- 22) riter. ゴットフリートにおいては、イングランド出身の、この土地の者ではない kneht (刀礼を受けておらず、まだ騎士となっていない貴族階級の子第) であり、二人を騎士に取り立てることが、イゾルトの約束する報酬の一つである。
- 23) ゴットフリート作では、イゾルトが証拠物件として要求するのはブランゲーネの舌である。
- 24) ゴットフリートでは、イゾルトが、頭痛がするから薬草を採ってきてくれと頼み、二人の knehte もまた、最初から案内役としてブランゲーネと共に森へ行くのである。
- 25) hemide (=hemedede). 日中だけ身に着けられた衣類で、寝床では脱いだものである (Gottfried: Tristan. Bechstein/Ganz 版12823行の注)。ここでは無論処女性の象徴である。なお、ゴットフリートでは「雪のように白い二枚の肌着 (zwei hemedede wiz alsam ein sne)」(12815) となっている。
- 26) ゴットフリート作によれば、惚れ薬（注20を参照）を葡萄酒と思って飲んだトリスタンとイゾルトは、たちまち激しい恋に陥り、その力に抗し難くやがて肉体の合一へと至る。マルケ王との初夜に、イゾルトがもはや処女でないことを隠す為に二人の取る手段が、ブランゲーネによる身代り（即ちマクデブルク断編1の表によって示される場面）である。惚れ薬を厳重に保管するよう、母イゾルトから命じられていたブランゲーネは、自分の不在中に二人がこれを飲んでしまったことに深く責任を感じ、泣く泣くこの身代りを承知するのである。次行以下では、上記の場面とそこに至る迄の過程が、ブランゲーネの口から暗示的に語られている。
- 27) ( )内は、写本Hによって補った。
- 28) イザルデの如何にも理不尽な仕打ちではあるが、ブランゲーネは彼女のためなら、死すら甘受しよう

小 澤 昭 夫

としたからである。

29) Kurvenal. トリスタンの師匠にして友である。

30) 3073行と3074行の間で場面は急に転換し、トリスタンは既に宮廷に戻り、イザルデと対面している。

31) テキストでは、ここ(3081行)で段落の区切りを示すために、一字下げられている。しかし次行から始まるのは、宮廷におけるトリスタンの立場を内容とする段落であり、この行はあとの段落に属するものではない。編者 Bußmann は、書き間違いと推測している。それ故訳文では、次の3082行を段落の区切りとした。

32) つまり「精神的に」である。

33) 原文の und [……] also staete an der minne. は意味不明。ここの訳は Lichtenstein 版のテキスト: und noch tuot, also stet an der minne. に拠り、前後の関係から、also の次に主語の ir が省略されていると推測してのものだが、文法上疑問は残る。

34) 原文は daz hat er verdienet und verscholt である。Wagner 版 [Eilhart von Oberge: Tristrant. I. Die alten Bruchstücke. Hrsg. von Kurt Wagner. Bonn und Leipzig 1924.] の Wörterbuch には、verscholt が見出語 verschulden の項にその過去分詞として示されているとのことである。verscholt なのは、前の行(3127)の holt と韻を踏むためと思われる。Benecke/Zarnke/Müller: Mittelhochdeutsches Wörterbuch (II<sup>2</sup>. 189<sup>b</sup>) verschulden の項に、wa mite han ich daz verscholt (: holt) の例がある。ここはほぼ同義語の繰り返しと理解した。